

ちょっといい話

毎日新聞

クーポンや割引券をうまく使え
たためしがない。気がつくといつ
も期限切れ。それに慣れっこにな
っているのも、もったいないとき
え感じなくなっている。
でも、これは使わねばもったい
ないと思うクーポンがある。風疹
の抗体検査とワクチンがセットに
なった無料クーポン券だ。
もしみなさんが1972年4月
2日〜79年4月1日生まれの男性
だったら、ほとんどの人がすでに
受け取ったはず。厚生労働省が今



記士 do-ki

青野 由利

クーポンと利他行動

春から導入し、全部で646万人
分を配った。来年度はその上の世
代の男性も対象となる。
なぜ限定配布かといえば、子ど
ものころ定期接種の対象から漏れ
た人々だから。その結果、自分が
感染するだけでなく、「感染源」
にもなってきた。最大の問題は妊
娠初期の女性に感染すると難聴や
心疾患などの障害を持つ赤ちゃん
が生まれる場合があることだ。
つまりクーポンは、他人にうつ
さないための「利他行動」を促す
ツールといえるだろう。
ところが、利用率は低調だ。4
〜8月に抗体検査を受けた人はク
ーポンを受け取った人の1割、ワ
クチンを接種した人は2%。近所

の医療機関で自費で受ければ1万
円前後するにもかかわらずだ。
「最大の原因は対象世代の男性
と企業の経営層の無関心」。そう
分析するのは筑波大で公衆衛生学
を研究する産業医の堀愛さんだ。
2013年の風疹流行時に20〜
49歳の男女約1800人を対象に
調べたところ、パートナーの妊娠
を希望している男性の2割がワク
チン接種を受けていたが、希望し
ていない男性では2・5%。ワク
チンの必要性を知っているかも妊

娠希望か否かに左右されていた。
中年男性が意思決定を担う多く
の職場でもワクチン接種が推進さ
れているとはいえないという。結
局、自分の子どもに関係なければ
無関心ということかもしれない。
今回は無料クーポンが利他行動
を後押しできるかどうかを占う実
験のようにも思えるが、現状をみ
ると「金銭的お得感」だけでは不
十分ということになる。

疹ワクチンの同時接種で手間を省
くことだ。実は厚生労働省も同時接種
を提案している。ただネックとな
るのは抗体検査で免疫が足りない
とわかった人しかワクチン接種の
クーポンを使えないことだ。
抗体検査は自分の感染歴を知る
いい機会だとは思いますが、ハードル
が高いかも。せっかく用意したワ
クチンが期限切れにならないよ
う、抗体検査抜きクーポン利用
も、ぜひ検討を。(専門編集委員)